

R I 会長のテーマと年度方針と

特別講演「21世紀のロータリー」

インカミング・ガバナー

南部 利昭 君



1. R I 会長の年度方針

きょうは、早朝から、県内各地からお集まりをいただきまして、まことにありがとうございます。先ほど聞きましたところ、きょうの登録はちょうど600名だということございまして、このような大勢の方々をお迎えしての地区協議会は、私もまことに心強く感じているところでございます。まさかこの地区協議会を2度やるとは思いませんでした。この間のベッツもそうでしたけれども、ましてや2度もアナハイムへも行って国際協議会を勉強してくるなど、大変私もガバナー冥利に尽きるというのか、ついてないというのか（笑）、よくわかりませんが、そんな気持ちしております。

きょうのこの地区協議会は、次年度のクラブ役員の方々にとりまして、また新入会員の方々にとりまして大変重要な会議でございまして、意義のある会合であるということでございます。地区大会がその年度の集大成とするならば、この地区協議会は、次のロータリー年度の出発点でございます。私ノミニーにとりまして、地区内各クラブの皆さんと顔を合わせ、地区の次年度の目標を語り合い、地区目標を達成するようクラブの奉仕活動の計画立案のお手伝いをするという大変重要な役目もでございます。どうかきょう1日おつき合いをいただいて、次年度のクラブ活動が、地区活動が、実りあるものになるようご協力いただきたいと願っているところでございます。

さて、次年度のR Iテーマ、皆様もうご存じだと思いますが、「ロータリー2000：活動は堅実、信望、持続」というものでございます。これは、国際協議会におきまして、R I会長エレクト、カルロ・ラビッツァ氏から発表になったものでございます。きょう、お手元のプログラムの2ページ、3ページにそのテーマの解説が詳しく載っておりますので、それをごらんいただければおわかりいただけると思います。私があえてそれを説明するのも何ですけれども、それをお読みいただきたい。けれども、それを解説して、皆さんによく伝えろという役目もでございますので、ちょっと重複いたしますが、お話をいたしたいと思っております。

この国際協議会でございますが、去る2月26日から3月6日まで9日間にわたりまして、ことしもアメリカカリフォルニア州のアナハイムというところにありますアナハイムヒルトン・アンド・タワーズというホテルで開かれました。集まったガバナーノミニーは、世界528地区から528人集まりました。それにR I役員、財団の役員、また研修リーダー、S A A、そしてホストクラブ、そういう関係者を合わせますと、全員が同伴出席でございますので、約1,500

人から1,800人規模の大会でございます。

まず、開会式から閉会式まで10の本会議がありました。それから21のグループセッション、それから5回のレセプション、3回の公式晩餐会という大変ハードなスケジュールでございましたが、私は2度目ということもありまして、割合余裕を持って大いに楽しんできたわけでございます。2度目に行きましたら、ある外国のノミニーが、リバイバルガバナーだというニックネームをつけてくれました。それを帰って盛岡クラブで話しましたところ、ある会員さんが、何を聞き違えたのかリサイクルガバナーと（笑）。まあ、再利用には違いないわけですから、リサイクルでも結構だろうと思っております。



交歓会 各国民族衣装で

今度アナハイムに行きましたガバナーの中で、女性のノミニー、これは全世界で23名おりました。4年前に私が行ったときには9名でしたので、女性の進出が目ざましいという感じを新たにされたわけでございます。次年度の女性ガバナーの内訳を見ますと、やっぱりアメリカが一番多くて17名でございました。あとは各国1人ずつ、カナダですとかオーストラリア、フランス、インド、ブラジル、アルゼンチンといったところが女性ガバナーを出しておりました。当地区でも女性の会長さんが既に何人か出ておられますので、近い将来あるいはガバナーを出すということにもなろうかと思えます。

そこで、カルロ・ラビッツァRI会長エレクトは、次年度、1999-2000年度、これをロータリー史上特別な年度であるというふう位置づけまして、次年度の活動に格段の期待を寄せております。と申しますのは、我々の年度は20世紀と21世紀をつなぐかけ橋、これを務める年度だからだということでございます。21世紀に向けてのステップインの年だということ強く強調されました。そして、カルロ会長エレクトは、「ロータリー2000：活動は堅実、信望、持続である」というテーマを掲げて我々に呼びかけたわけです。20世紀から21世紀、これは大晦日から元日になれば、そのまま日付が変わるわけですが、単なる日付の変更ではない。人々は、新しい年度に大きな期待を抱くものだということでございます。ことしも4月1日から各企業も新しい年度に入っております。新学期も始まったわけですが、やはり人々は、新しい年度に対して大きな期待

を抱き、そして何か変わるんじゃないか、新しいことが始まるんじゃないかという期待を持つわけでございます。ロータリーも同じく、21世紀に向けて変わらなければならない時期に来ているということでございます。

ロータリーが誕生いたしまして95年、多くの先輩ロータリアンたちが築き上げてきたこのロータリー、大勢の先輩諸兄の英知によりまして、大きく発展し飛躍して今日の姿になっているわけでございます。その間、数多くの奉仕プログラムにおきまして大成功をおさめてまいりました。それなら、なぜ今変えなければいけないだろうという疑問もわいてまいりますが、とにかく変えていかなければいけない。その理由の1つが、会員の減少という現実でございます。1997-98年度には、初めて会員数が漸減いたしました。それまでは何とか、新クラブの誕生ということによりまして、既存クラブの会員は減りましたけれども、つじつまを合わせてきたということでしたが、97年-98年度から初めて、新クラブの結成にもかかわらず会員は減少したということでございます。これは何もロータリーだけのことでございませぬ。しかし、ロータリーに魅力を感じなくなってやめていく人も多いということも事実でございます。来るべき2000年に向けて、ロータリーをさらに強化しようということであれば、各クラブの内部強化から始めていただきたい、そのように強く要望いたします。

ロータリアンを教育する研修プログラム、これを各クラブでも始めていただきたい。私たちロータリアンには、守らなければならない基本的な規則ルールというものがございませぬ。これをクラブの全員が堅実に守ってこそ一部の退会予備軍といいますが、そういう方々をつなぎとめる鍵になるはずでございます。例えば、例会時間の60%は出席しなければいけないという義務がございませぬ。にもかかわらず、顔だけ出して退席する会員もいるというのが現実でございます。会員の質いかんによりまして私たちの力のほどが決まるわけでございます。我々人間は、本来それぞれ異なった性格を持っているわけでございます。ということは、必ずしもだれしもが熱心なロータリアンになるのに必要な個人的な資質を持っているわけではございませぬ。そこで、先ほど申しました再教育というのが必要になってくるわけでございます。会員の減少に歯どめをかけることは、量か質かという問題は、これはイコールで考えていただきたい。量も大事、また質も大事だと。しかしながら、量を追いかけるばかりで質が失われるということは、クラブにとってこれは大変な損失でございます。クラブの活力の低下にもつながりかねないということで、先ほど申し上げました会員の教育プログラムというものが大変重要になってまいります。

現在、世界で120万のロータリアンがおります。そのうち熱心なロータリアンと言われるのはわずか30%ぐらいだそうでございます。残り70%の会員が本当に熱心なロータリアンに変わったといたしましたらどれだけのことがなし遂げられるのか、皆さん想像していただきたいと思えます。それが実際に成功をおさめれば、21世紀のロータリーはまことにバラ色でございます。ですから、21世紀に備えることが我々の課題でございます。このことが次年度の最重要課題であるということはおわかりいただけたらと思う。ですから、次年度のテーマの最初は「ロータリー2000：21世紀のかけ橋」ということを強調しております。

西暦2005年にはロータリーは100周年を迎えるわけでございます。この95年



間にも、ロータリーは大きく変化し、そして拡大・成長を遂げてまいりました。社会はいろいろな方面で変化しております。人々のニーズもそれとともに変化しております。ロータリーも我々も、同じく変化しなければいけない。そして、我々はそのロータリーを変えていく責務を負っているということを自覚していただきたいと思えます。

ロータリーの創始者ポール・ハリスは、1930年のシカゴの大会におきまして次のようなことを申しました。「ロータリーがその運命を適正に実現しようとするなら、ロータリーはいつも発展し続け、時には革新的にすら変化しなければならない」ということを申しました。これは、ロータリーができてわずか25年後に語られた言葉でございます。

私たちがロータリーという組織を新しい世紀につないでいくためには、その核となる原則、我々の行動基盤となる基本的価値が必要になってまいります。その原則の第1番目が、「堅実でなければならない」ということでございます。先ほどもちょっと触れましたが、一部のクラブがあるいは地区で、ロータリーの規則を無視しているところがあるやに聞いております。我々の決めた規則自体が現代と矛盾しているならば、我々はそれを変えなければならない義務を負っているわけでございます。もしそうであれば、規定審議会という民主的な手続を通じて規則を変える必要がございます。みんなが納得して尊重するような新たな規則をつくる必要もあろうかと思えます。ロータリーという国際的な組織でございますので、国によって文化も違う、伝統も違う、いろいろな価値観も違ってまいります。ですから、それぞれの国に合わせた柔軟な規則に手直しできるのであれば、我々ロータリアンとして、実際に推進する上でまことに適正なものだろうというふうに思いますし、これが堅実というものにつながってくるのではないかなと思います。そうなりますとその結果、現会員の退会を防止し、さらに新会員を多く迎えることができるのではないのでしょうか。そこで consistency (堅実) ということをカルロさんは強調したわけでございます。consistency と言いましてもこれは、日本語訳で辞書を見ますといろいろな訳が出ております。R I では堅実というふうに訳しましたが、私に言わせれば一貫性と言った方がぴんと来るんじゃないかなというふうに思ったりいたしております。

このことによりまして、さらに「信望をも高める」ということにつながってまいります。信望こそがロータリーが伝統的に受け継いできた特長でございました。英語で credibility は信望と訳しますが、信望というよりも信頼あるいは人望と言った方がわかりやすいかも知れません。ロータリーは今まで95年にわたってこの信頼を勝ち取ってきたわけでございますが、足元を見つめ直し堅実に歩んでこそ、さらに信望を得ることができるということでございます。ロータリアンが、地域社会において有意義な奉仕プログラムを行ってれば、ロータリーの存在価値というものは高く評価され、さらに信頼を勝ち取ることは間違いないわけでございます。ロータリーの未来を握っているのは、ロータリーの原則に堅実でしかもその行動に対し信頼を集めている会員、そしてクラブでございます。

そして、3番目に重要なのは、continuity (持続) でございます。これも継続と言った方がわかりやすいかも知れません。ロータリーの役員任期は、一部を除きまして1年でございます。毎年7月1日には、R I 会長を含めリーダーが替わるわけでございます。これは、一般企業にとりましては全く考えられない経営システムでございます。これは、ロータリーの名称の由来になりました輪番制というものの名残でございます。しかもこれは、指導者が毎年替わるということによってロータリーは今まで発展してまいりました。しかしながら、指導者が替わるごとにプログラムや目標というものが変わるということにもつながりかねないことであります。7月1日に指導者が毎年替わることは、これはロータリーの不変の特長でありますけれども、これに付随しましてプログラムや目標までを変える必要は全くないわけでございます。今や複数年にわたるプロジェクトも数多くございますし、ほとんどが持続しているプログラムだろうというふうに思います。

カルロ R I 会長エレクトが会長ノミニニーになったときに、当時のグレン・キンロス R I 会長は、エレクトをエバンストンに呼んで、レイシー次期会長と一緒にみんなで意思決定の場に加えてくれたということでありまして、カルロ氏によれば、「これはロータリーにとって画期的な出来事であった」というふうに述懐しておりました。「今までこういうことがなかったことが全く不思議だ」と。そして、「このトップスリーで決めたこと、これは大変重要なことだ。これが持続性及び地域社会における信頼を勝ち取る鍵になる」ということに気がついたわけでございます。ですから、地区にとっても、またクラブにおきましても、新しいプログラムを出すとき、あるいはクラブ計画を立案するとき、これはぜひ次期会長さん、また次々期の会長さんも含めて、パスト会長さんを入れて大勢の人でそれを審議してほしいということでございます。そのことが21世紀に我々の活動が成功するために必要な安定性というものを生み出すということだろうと思っております。

ですから、次期カルロ会長は、「次年度は新しいプログラムは出しません。率直に言ってそんな必要はないんだ。歴代の R I 会長が始められたプログラムは、あらゆる範囲の人道的目的を網羅しております。ですから、次年度再び新しいプログラムは出さない。今までやってきたポリオプラス、あるいは識字率向上、あるいは青少年問題、また飢餓・貧困の問題、そういうことにもっと踏み込んでやってくれ」ということございまして、「それをするためには、皆

さんの行動に期待する」ということをごさいます。ですから、既に皆様方がクラブにおいて実行されているプログラムを次年度も継続、そして拡張・発展させることが重要になってまいりますし、それがR Iも望んでいることだということをご認識いただきたいと思ひます。そのほかにも、地区あるいはクラブが、いろいろなWCSあるいは地域社会に対する奉仕プログラムを数多くやっているわけでごさいます、何も7月1日に年度が変わったからといって、新しい会長のもとで変えることは必要ない。継続し、持続することこそ、地域社会において信望を勝ち取るということでごさいます。

また、その持続あるいは継続して奉仕活動を推進する第2の方法といたしまして、新たな複数年度にわたるプログラムを始めることもいいかもしれせん。クラブ会長さんは、次期のクラブ会長さん、あるいは役員の方々と協力して、すべての会員が自分のプロジェクトだと思ひような長期プロジェクトを計画していただきたいと思ひます。クラブの会員全員がそのプログラムに直接携わることによって、そのプログラムは大成功をおさめることは間違いごさいません。



ここでカルロ・ラビッツァ次期R I会長は、「我々の考え方をIからWeに変えようじゃないか」ということを申しました。そして、「エゴからチームワークへ」ということをつけ加えました。「IからWeへ」と言っても、これはかつてロータリーで何回も論争が起きていたI serve, We serveというものではごさいません。この論争はもうとくに終わっております。ロータリーの原点であります職業を通じての奉仕、これはI serveでごさいますし、クラブのみんなが決めたプログラム、これが全員で参加するということはWe serveでごさいますし、ポリオプラス・プログラム、R Iで決めたこれをやろうということ、これはWe serveでごさいます。また個人でロータリー財団に寄附を申し込んで用途を指定すると、これはI serveでごさいますし、クラブで基金を積み立ててロータリー財団に増額補助金を申請するといったことは、これはWe serveになるわけでごさいます。しかし、カルロさんが言いたいのは、「地区のリーダーあるいはクラブのリーダーが、事を決めるに当たっては後継者を巻き込みなさい。自分1人で決めるんじゃない、みんなで話し合っ決めてなさい」と。これが「IからWeへ」だろうというふうには私に解釈いたしました。そして、「エゴからチームワークへ」というのもそういうことでごさいます。

日本語でエゴというと、何かちょっと悪い方の意味が強い感じがいたしますけれども、英語でエゴというのは、決して日本語で思ひほど悪い意味じゃないようでごさいます、「自分で考えるよりも人の知恵を借りろ」ということでごさいます。ですから、個人の力には限度があるわけでごさいます、クラブ全体で、あるいは地区全体で事に当たれば、安定した成果が得られますし、またそのチームワークによって大きな連帯と理解が生まれ、それが成功につながる。それがエゴからチームワークへということでごさいます。1999-2000年には、以上のようなことを念頭に置いてロータリー活動を実践していただきたい。このことが21世紀へつなぐ我々の役目でごさいます。

以上、概略次年度のテーマ、「ロータリー2000：活動は堅実、信望、持続」というものについてご説明をいたしました、おわかりいただけたかどうか、後でご質問ありましたら伺いたいと思ひます。テーマの原文は英語でごさいます、日本語訳になっておりますが、辞書を見ますといろいろな訳が出ております。皆様方がこの中でいいという訳を当てはめて考えていただければいいんじゃないかなというふうに思ひます。

今までの歴代R I会長のテーマ、今年度は「Show Your Rotary Dream」、その前がいろいろそれぞれターゲットを掲げてこられました。ロータリアンとしてのターゲット。しかし、今度のテーマは、今までの歴代会長が掲げられたターゲットを遂行するためのロータリアンとしてのスタンスを示しているんだなというふうには私に感じました。皆さんどうお感じになったかわかりませんが、私は、ターゲットじゃない、これはスタンスだなというふうに思ひます。そういうことでご理解いただけるんじゃないかなというふうに思ひます。

それから、これは皆様へのごさいます、先ほどちょっと触れましたけれども、それは規定審議会に關してのことでごさいます。ご承知のように、規定審議会はR Iの立法機関でごさいます、3年に1度開催されます。そして、国際ロータリーのさまざまな立法案を審議しまして、時代に即した制定案をつくっていくわけでごさいます、例のメーキャップ期間が2週間から4週間になったというのも、前々回の規定審議会で制定されたものでごさいます。前回はインドのデリーで開催され、山内バスターが行かれましたが、次回は2001年の4月にアメリカのシカゴで開催される予定になっております。そこで、来年の地区大会におきましては、当地区から選出する代表議員、補欠を含めましてこれを選出するというごさいます。これは、バスターガバナーによりまず諮問委員会で決定して、皆さんにお諮りするわけでごさいます。

カルロ・ラビッツァ会長エレクトは、これからはその規定審議会の審議のやり方も変えなければならない、コンピューターも導入するんだ、そして審議のやり方も変えていくということをお言ひしました。そして、先ほど申しましたように、21世紀のロータリーをさらに一層飛躍・強化させるために、地区あるいはクラブがこぞって建設的な立法案を遠慮なく出してほしいというふうにお申ししております。クラブからの要望あるいは地区からの要望、こうしてほしい、ああしてほしいといった注文は遠慮なく出してくれと。例えば、地区大会は1日でもう終わりにしてくれとか、地区協議会とベッツと一緒にしてくれとか、いろいろおありでしょうけれども、そういうのも遠慮なく出してくれということをお言ひしました。これが採用になるかどうか、あるいは規定審議会の場

に持ち出せるかどうか、そこまではわかりませんが、そういうことも、何でもいいから出してくれということをおっしゃっています。その規定審議会に提出する手続といたしましては、手続要覧第14条に詳しく出ておりますので、お読みいただければわかるかと思えます。

次に、皆様にご報告をいたしますが、1996年2月にR Iの理事会、ここにおきまして、3年間の試験的プログラムを実施した後に、地区リーダーシッププランというのをR Iの理事会は承認いたしました。これは、地区ガバナーの任務が増大するに連れましていろいろな問題が派生してまいりますが、それに対処するために考案されたものでございます。これは、当初オーストラリアとかニュージーランドあるいはラテンアメリカといったような、地区内のクラブとクラブの距離が1,000kmぐらいあるというところもある、時差があるというところもあるそうございまして、そんな地区では、とってガバナーが1人で目が届かないということで、ここに複数のガバナー補佐というのを置いて、ガバナーとクラブの間の密接な関係を築く、そうすると今まで以上に地区の管理運営がスムーズに行くと。しかもガバナーの負担が少なくて済むといったようなことで出てきたプランでございます。地区リーダーシッププランと言いますが、我々の地区にとっては余り問題ないんですけれども結局、分区代理を強化して分区代理を大いに活用するというふうにお考えいただければおわかりいただけると思えます。

R Iの理事会は、すべての地区がそれぞれの地区のニーズに合わせて地区リーダーシッププランを採用するよう考慮してほしいというふうに奨励しております。しかし、これはあくまでも奨励でございまして強制ではございません。その地区によって、地区の実情でやってくれということございまして、現在全世界では約半分近い地区で、既にこの地区リーダーシッププランを採用してガバナー補佐というのを置いているところがあるそうでございます。日本でも34地区の中で8地区、今実施しておりますし、次年度はさらに2、3の地区がふえるんじゃないかということでございます。こういうことが出ておりますので、将来この地区リーダーシッププランというのは避けて通れない問題だろうというふうに思えます。それで、去る2月に行われましたパストガバナーの諮問委員会におきましてこの問題も出ました。そして、この2520地区では当分



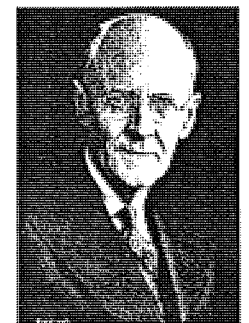
区代理制度で行きます。しかし今現在8分区ございまして、これを4分区に再編成、再統合しようという方針で合意いたしまして、きょう会長、分区代理部会で再度ご提案するつもりでございますが、2001年-2002年の白倉年度のときからそれでいきたいというふうに考えております。そういうことによりまして、I Mも現在8分区やっていますけれどもそれが半分で済みます。クラブの負担も少なくなるというふうに思いますし、できれば次年度I Mはそういうことも踏まえまして、合同I Mというのも考えていただけないかなと思っております。

なぜこんな地区リーダーシッププランなんていうのが出てきたかといいますと、先ほど言いましたようなガバナーの負担減というのもございますけれども、1つの地区という単位が目安というものが40クラブ、そして会員数1,800人というのが目安になっております。この2520地区は、今44クラブ、会員数1,860人ぐらいですので、かろうじて地区としての条件はクリアしているわけでございますが、中にはそれに満たない地区もあるわけでございます。そういう地区は、地区統合をしてリーダーシッププランを採用しなさいというのがR Iの方針じゃないのかなというふうな感じもいたしております。ガバナーの数を減らすということは、国際協議会におきましても大変経費の節減になるわけでございますので、ゆくゆくはそういうことも考慮に入れなきゃいけないかなというふうに思えます。全世界では50クラブ未満の地区が40%もございまして、1,800人未満の地区が37%もある。ですから、そういうところは統合してガバナー補佐を置きなさいということだろうと思えます。そんなところで、きょうのところはお含み置きをいただきたいと思えます。

2. 21世紀のロータリー

さて、それでは次のテーマでございまして21世紀のロータリーは一体どうなるんだろうということを皆さんとともに考えてみたいと思えます。

ポール・ハリスが1905年にシカゴで初めてロータリーをつくったことは、皆さん既にご承知のとおりでございますが、それから約95年を経まして約1世紀たつてロータリーは、社会の変貌とともに大きく変わりがちながら成長してまいりました。そして、現在のような世界160の国、120万の会員という巨大な組織へと成長を遂げてきたわけでございます。これは、恐らくポール・ハリスも当初考えてもみなかったことだろうと思えますが、それならばもうここまで来た以上、だまってもさらに雪だるま式に大きくなっていくんだろうかということを考えますと、残念ながら答えはNOであります。このままただ手をこまねいていけば、恐らくロータリーは消滅への道をたどるであろうということを言われております。これは、先ほど申しまし



創設者 ポール・ハリス

たような最近の会員の減少傾向ということから見ましてもまことに明らかなこととでございます。1997-98年度には、第二次世界大戦以来初めて、ロータリーの会員の漸減というような現象が起きたということは先ほども申しました。

これは、何もロータリーだけに限ったことではございません。スポーツクラブあるいは協会、そして他の奉仕団体におきましても、同じような現象が起きております。アメリカの例でございますが、名前を聞いたこともおありかと思えますが、エルプスという奉仕団体がございまして、メイソングズというのもございます。キワニス、ゾンタというのもございます。こういう団体は、今会員の減少の大きな痛手を負っております。アメリカの例ですが、J Cの会員数は、1979年44%減少したと言われておりますし、ライオンズは1983年以来12%減少しております。ロータリーは、幸いなことに減少と言いましてもわずか1%にとどまっております。これが今後どうなるかは我々の努力次第だということになってまいります。

この会員の減少傾向というのはさまざまな原因が考えられております。経済状況もちろんその要因の1つでございますが、先進国における少子化問題あるいは高齢化社会、経済動向とか、いろんな社会の変化もろもろがかみ合っていることだろうと思っておりますけれども、一番の要因は生活環境の変化だと言われております。最近の急激な科学技術の進歩というものが、我々の生活環境に大変大きな影響を与えております。現在は情報社会だと言われております。インターネットあるいはホームページ、Eメールというもので、家にいながら簡単にあらゆる情報が入手でき、またこちらから情報を送ることもできるわけでございます。そうすると一体どういうことになるんだろう。奉仕活動をしたと思っている若い人たちも大勢いるわけでございますが、けれど会費を払ってまでクラブに出向いて、みんなと情報交換するようなことは必要なくなってくるわけです。自分でやりたい奉仕活動のプログラムは簡単に検索できるわけでございますし、仲間もすぐ見つけられる。ですから、若い人たちのクラブ離れというものは現実に起きているわけでございます。これが先進国の一般的傾向でございます。

生活の風習の変化というものは、1人でいる方がいいというふうな考え方に変わってきております。いろいろな機器の発達で、ポール・ハリスが味わったような都会の中の孤独感というのが、今やないわけでございます。ゲーム機なんかで遊んでいる方が、1人で遊ぶことが今普通になっております。アメリカの心理学者によりますと、2014年にはトランプ遊びというのはアメリカからなくなるだろうということすら言っている学者がおります。

このような急速な社会構造の変化の中で、果たしてロータリーはこのままでいいのか、疑問視されるところでございます。先ほど申しましたように、このようなクラブ離れの中で、幸いロータリーはわずか1%の減少にとどまっております。これは、ロータリーには他の奉仕団体にはない魅力があるからだろうと思えます。この魅力をさらに引き出し、そしてその輪を広げることこそロータリーが21世紀に生き残る道ではないでしょうか。

経済的不況の時期でありました1920年あるいは30年代、なぜかそのときはロータリーにとりましては成長の時期でございました。それにもかかわらず、ロータリーの組織は、成長というものにあぐらをかいて、何ら柔軟性を持たず変

更されることはなかったわけです。私たちが、今、きょう行っているようなクラブ活動あるいは地区活動、これが何とロータリーが存在し始めた最初の年に決められたことがほとんどだということは、まことに驚きでございます。このことがロータリーの成長を助けてきたと言えればそれまでですけれども、週1回の例会、毎年替わるクラブ役員、地区大会のあり方、これらを含め我々が今考え直す時期に来ているんじゃないか、それを皆さんと一緒に考えよう、それを規定審議会で皆さんと諮ろうということとございまして、このこともカルロさんが大変強調したこととでございます。2001年の規定審議会は、今までにない重要なものになることは間違いないと言われております。ですから、今までの既定の枠にとらわれることなく、皆さんの自由な発想で21世紀のロータリーの夢を描いて、それを反映させてほしいということが注文でございます。

「21世紀のロータリーは一体どうなるのか」ということとすけれども、その答えは「我々次第だ」ということとでございます。次年度、21世紀へのステップインの年がどれだけのことがやれるのか、それに皆さんチャレンジしていただきたい。これが次の世代へロータリーを引き継いでいく上で大変やりがいのある仕事ではないだろうかということとでございます。ですから、皆さんが感じになっているロータリーの魅力、これをさらに伸ばし他の団体にはない魅力を多くの人に味わってもらうために、多くの新しい会員を募っていただきたいと思えます。

21世紀のロータリーは、結局は我々次第だということになって、まことにおもしろくない話になりましたけれども、御清聴ありがとうございました。(拍手)

南部利昭 (なんぶとしあき)

●主な経歴

昭和10年9月16日東京都に生まれる
昭和26年岩手大学附属中学校卒業
昭和29年学習院高等科卒業
昭和33年学習院大学政経学部卒業
昭和33年電通入社
昭和54年同東京本社第六連絡局部長の後、
昭和56年退社
昭和62年盛岡ロータリークラブに入会
平成4年同クラブ理事・会長
平成7、11年国際ロータリー第2520地区ガバナー
シニア・アクチブ
マルチプル・フェロー
ベネファクター
米山功労者